

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑩

今年になってすぐの 1 月 9 日に若林夫妻が東京にやってきた。A さんの博士課程の研究のためである。いつものようにタイ担当のゴミさんが A さんと連絡を取り合っていたが、9 日は時間が取れるので何かお手伝いできればと思っていた。9 日朝 5 時に羽田空港に着くという。「9 時に立川駅で待ち合わせ」とゴミさんからメールがあった。立川にある国文学研究資料館に行きたいとのことであった。調べてみたらこの日は休館日であることが分かった。前日の夕方のことだったので、あわてて A さんに直接メールを送った。今空港へ向かうところで東京に着いたら電話をすること。朝 8 時過ぎに若林さんから電話が来た。「今新宿です。どうしたらいいでしょう？」公衆電話からで、もう 10 円玉が無くなるということで急いで話し、10 時に上野駅の公園口で会う約束をした。この電話で起きた私は急いで朝食を済ませ上野へ向かった。着いたのは 10 時 2 分前。若林夫妻の姿を見つけた。

ムンク展を見たいということで東京都美術館を目指した。A さんは昨年 10 月に発売されたばかりの 125 倍というとてもない高倍率のデジカメを持っていた。3000 ミリに相当する。タイで撮った鳥を見せてもらった。きれいによく写っている。もともと A さんは鳥に上手に近づけるので、このカメラを持ったらなんでも撮れてしまうと思った。

A さんは野鳥を撮影したいということで不忍池へ、私と若林さんはムンク展へ行くことになった。お昼近くに合流し、上野でお昼を食べた。午後はと尋ねたら飛行機で 1 時間ぐらいいか寝てなく、宿に行って仮眠を取りたいという。新宿で別れた。

後日 12 日に縦勢 8 人で二人の歓迎会を開いた。二人は 13 日に京都へ向かった。20 日にタイに戻るという。「京都に着いた。」と連絡があった。次に会うのは 8 月にタイであろう。

今回の来日で若林さんから日記風随筆の最新版をいただいた。昨年のタイ環境学習キャンプについて詳しく書かれていたので紹介する。本会会報「ナマステ 133 号」(2018 年 9 月 10 日)に「タイ環境学習キャンプ」報告と題して大窪青樹さんが寄稿してくれているが併せて読まれると面白いと思う。(中込 卓男)

(注) 文中の A さんとは、若林夫人のことであり、ポンティップさんのことです。



▲東京都美術館 若林夫妻

『2018 日記より』 (1/2)

若林卓司

2018 年 8 月 11 日

朝、テレビのニュースを見ていたら、7 時半ごろ、ポンティップがゴミさんから Facebook (フェイスブック) のメッセージが来ているという。深夜に着いて、今日の 3 時まで時間が空いているというものだった。会うのは明日だったが、私はチャトチャ公園へ走りに行って、それからシリキット公園での母の日の行事に行く予定だったので、10 時頃チャトチャ公園で会うことにした。ポンティップはお母さんと一足先に会場へ行った。一行は 3 人。ゴミ、ゴメ、大窪さん。後、200 メートル走れば 5 キロのところまで電話がかかってきて、電話を受ける画像が出ないので、歩きながらごそそしているうちに 3 人に会った。



▲左から 大窪くん 中ゴミさん 若林さん

シリキット公園でポンティップに会ってから、通りに並んでいる店を覗きながら歩く。ポンティップがパーラ・ウーの「コップ・メー・タオ」という品種のドリアンを買って、みんなで分けて食べた。バ

ターのような感じがした。1個600パーツ(約2040円)だった。



▲ポンティップ若林さん ドリアン

今回の展示はおもしろかった。ホテルのことでバンポット・ナポムペート編「ホテルの多様性と保護」という英語の研究誌がもらえ、係りの人と話げできた。他にもマングローブ林を利用したいろいろの製品、ハラバラーのチョウ、サイチョウ、ゴムの木にできる南部のキノコ等、面白い企画があった。



▲ホテルの展示 若林夫妻

出店でパッタイ、ホーイ・トート、カノム・チーン、カーオマンカイ等を頼んで食べる。お土産の交換をする。毎回毎回私たちは二人にいいものをもらう。時間が来たので3人を送り、お母さんにはちょっと待ってもらって、二人で車を取りに行くが、いい加減に駐車している奴がいて、車が出せない。仕方がないので、タクシーを捕まえて帰った。車は夕方、弟に取りにいつてくれるように頼んだ。帰ってから二人とも仮眠。ポンティップは今日徹夜になるかもしれない。

8月12日

9時にラーチャパット・プラナコーン大学を出発することになっていたのに、8時前にコンドーを出て、タクシーを捕まえる。大学内のホテルで、ゴミ、

ゴミ、大窪さんの三人に会って話していると、迎えるのバンが来た。運転手はいつものミックさん。バンの中で、ゴミさんが「ギャル曽根」知ってるかと聞いてきた。昨夜、ラダワン先生に招待されたとき、一緒に来ていた若い女の子はよく知っていると言った。話を聞くと、タイに大食いの挑戦に来て、ことごとく勝利を得て、タイ人にも知名度が高いという。私らはよく知らないのに、ポンティップがiPad(アイパッド)で動画を探す。カノム・コックでタイのチャンピオンに挑戦したものがあつた。制限時間は聞き逃したが、560個も食べて勝利した。これはすごいことである。早速次の授業で学生に聞いてみようと思った。

スパンブリーで恒例のビール買いやゴミさんの実験の品を探すのに時間がかかり、バーンライのパンダキャンプに着いたのが1時半ごろ。それからこれもいつものようにノイさんの奥さんキーさんと、イェンさんの作ってくれた昼を食べ、3時ごろシーナカリンダム湖の畔にあるバーン・ナム・ウーへ向けて出発した。シリポンさんは炊事用具や魚取り道具、ゴミ・ゴメの金の虎の子ビールなどを乗せて、ノイさんとピックアップトラックで道案内をしてくれた。ウタイタニーからカンチャナブリーのダム湖まで、思っていたより早く行けるのが分かったが、なかなかの僻地である。私たちはここで二泊することになっている。着いたのが5時ごろ。寝るのは筏の上なので、荷物を積み込み、繫留地まで引っ張ってもらう。



さっそく、キーさん、イェンさんには夕食の用意をしてもらう。ノイさんが魚釣りを始めるがなかなか掛からなかった。夕食を済まし、暗くなってから、屋根に付いた太陽光パネルで発電した電灯に虫が集まりだしたが、筏に来ていたオーナーが8時には虫はいなくなると言っていたが、その通りいなくなった。ポンティップはノイさんやオーナーと話していたが、私たちはシリポンさんに、横道にそれ

ながらも、みっちり3時間、ミツバチやハリナシバチの話聞いた。この時通訳した内容はパンダキャンプに戻ってからのワークショップでの通訳に役に立った。

科の魚が多いが、ナマズもいた。10匹近く買って60バーツ(約200円)だった。



▲筏(水上コテージ) 中央下がシリボンさん

一旦、筏に戻り、昼を食べ、再びフーワイカーケン野生動物保護区の一歩南に当たるクルン・クライのレインジャーの駐屯地へ行った。オーナーからこの辺りには野生の水牛が見られると聞いていたので、注意深く岸辺を見ていると小群が居る。遠くから、逃がしてはならずと写真を撮り始める。船を近づけて双眼鏡で見ると、鼻のところにローブが通っているのが見えた。普通の水牛である。目的地に近づいたところでも水牛の群れ。黒々とした一匹のオスは只者ではない。

8月13日

寝ているとき、筏に打ち寄せる波の音を聞いたが、あまりゆれなかった。起きだしてテラスに集まって話をしていると鋭いカワセミの声。アオショウビンであった。ご飯の前にみんなでひと泳ぎをした。食後、スピードボートに乗って、パーク・カーケン寺へ行った。



▲キーさんとイェンさん



ほかの鳥はあまりいなかった。ここで見た彩色のゴキブリは珍しいのかもしれない。寺を出て、舟でぐるっと回って、筏の上の小さな店へ行った。ここで魚を売っているの、それを買うためである。フナ

再び、カメラの砲火を浴びせる。今度はロープも見当たらない。半信半疑の気持ちもあったが、誰もが本物を見たと思った。これは後でレインジャーに聞いたことだが、野生の水牛は保護区の奥にいて、こんなところにはいないということだ。船着き場に舟をつけて、小高いところにある駐屯地へ上がる。レインジャーの人に快く迎えてもらった。湖はこの辺りから川状になり、ジャングルの奥に消えていた。



このカーケン川を溯れば何年前に行ったカオバンダーイに行ける。天候は雨が降ったり止んだりだが、強くは降らないので、ずいぶん助かった。筏に戻ってから、私と大窪さん以外は救命具を付けて泳いでいたが、私は筏の上から景色を眺めて時間を過ごした。なかなか落ち着く景色なのだ。



昨日、電灯をつければ虫が寄ってきたので、この日はまだ明るい5時過ぎに夕食にした。毎回毎回大変だと思うが、キーさんとイェンさんが作ってくれる料理はおいしかった。



▲キーさんとイェンさんの調理場。食材、調理器具は持参したもの



私は、食後仮眠したが、起きて驚いた。みんな筏のテラスで小さくなっているのだ。灯下にやってくる虫が半端じゃないからだ。よく見たら、力の仲間だが灯下の向こう側が見えないぐらいなのだ。水面に落ちた虫を食べにアメンボやもっと小さい水面を泳ぐ虫が来ているのを見つけたので、この小さいのを少し採集した。この日は光を使うと、虫が寄ってくるので早く寝ることになった。雨が少し強く降り、筏はよく揺れた。



二日間、筏の上で珍しいコーヒーを飲んだ。キー、イェン二人のコメの炊き方は水を捨てながら炊くので、とぎ汁が出る。そのとぎ汁をお湯代わりに使うのだ。最初は、それはちょっとと思ったが、飲んでみて悪くはなかった。ゴミさんが重湯みたいだと言っていた。

8月14日

朝起きたら、ノイさんが、仕掛けた網を上げていた。前日はほとんど掛からなかったのだが、今朝は30匹以上掛かったと得意気だった。これらの魚はすべてから揚げになって昼食のおかずになった。



朝食の後、迎えのボートがやってきて、筏を元の位置まで引っ張って行った。今日はオーナーの息子さ

んの案内で、湖の畔を北上して、クルアン・クライというカレンの集落へ行くことになっている。タイ共産党の活動を聴くためである。国境警察が管理する学校の隣の家を訪問した。



そこのニコムという77歳の老人に話を聞いた。ニコムさんはマハーサーラカムの人で、シーナカリンドラムの水没予定地を調査するためにここに来て、カレンの女性と知り合い結婚して定住したという。後で村長が来られたが、この人が息子さんだった。村長は地方史であっても歴史を残すために、まず、カン・スパン・ウタイ3県の関係者を呼んで慰霊祭を行い、そういう人から資料を集めたいと言っておられた。いろいろ話しているうちにニコムさんの奥さんも来られたが、話が聞きづらく、ノーイさんに通訳してもらった。ここで聞いた話は別のところに書こうと思う。シリポンさんが山の上に住んでいるカンボジア語を話す人々について聞いていたが、このごろは人口が減ってきていることしかわからなかった。私も大学でカンチャナブリーのカンボジア語を話す人について聞いたことがあるが、この辺りのことだとは知らなかった。その後、すぐ近くのお寺により、筏のところまで戻った。



ピックアップの荷台に乗っていたポンティップがインコの群れを見たと言っていた。地元の人はタイ語で「ノッカリン」（スグロコセイインコ）と呼んでいるのだが、図鑑では生息地とちょっと外れているので、種の同定はできなかった。

筏に戻り、昼を食べ、荷物をピックアップに運び込んだ。中に5人、荷台に半分以上を占める荷物と4人が乗って、2時間ほどかけてパンダキャンプに戻った。

私は例のごとく、シリポンさんと話詰めになった戻ってから、預かってもらっていた荷物を取りにシリポンさんの家に行った。ここにはハリナシバチの9つの巣があった。ハリナシバチは蜜の採集が多くできないが、ハチが集めてきた花粉と樹脂から作られるプロポリスは役に立つものだという。とくに後者は薬の原料として最近注目されているようだ。シリポンさんは私たちにこの三つのもを試食させるために、結構手荒に巣を扱うので、怒ったハチはうるさく付きまとい、髪の毛の中まで入ってきた。針はないので刺されないが、噛み付いてくる。花粉はちょっと酸っぱく、プロポリスはちょっと苦かった。



次回につづく